

---

# 空に浮かぶわたあめのように - あの雲のようにのんびりと -

雲水コウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空に浮かぶわたあめのように - あの雲のようにのんびりと -

### 【Nコード】

N9668A

### 【作者名】

雲水コウ

### 【あらすじ】

柴丘迅は、進路について悩んでいた。友人の澄空水は、「自分で考えることですよ?」「自分より適役な人がいる」と言って返したのだった。迅は水と別れ、幼馴染の黄島満月と会う。そして、彼女と話していくうち、自分の進路がなんとなく見えてくるのだった。

## （前書き）

これは、一話完結短編連作です。モチロンの話から読んでも大丈夫な作りになってます。ですので、安心して読みください。

一話目　　あの雲のようにのんびりと

「迅くん、ちよつと待った!」

学校からの帰路を一緒に歩いていた友人の澄空<sup>すみぞら</sup>　水が、缶ジュー  
スを開けようとした俺に制止の声をかけてきた。

ちなみに、俺は柴丘<sup>しばか</sup>　迅<sup>じん</sup>だ。

「水、なにを待てつつーんだよ」

「それだよ、それ。その缶ジュース」

「ただの缶ジュースだけど、それがどうしたか？」

俺が持っているのは、あの米国生まれで炭酸飲料水の王様。赤い  
カラーが似合うアレである。

「それは炭酸飲料水だろ？」　ならやることは一つ!」

びしつと効果音が付いてきそうなぐらいの勢いで、水は俺を指さ  
してくる。

言われ、俺は水がなにが言いたいのかわかった。

「お前、まさか……しろつて言うんじゃねえだろうな？」

俺は後ろめたいことでも言うかのように声をひそめる。

「そう。それをすんだよ、迅くん」

水がニヤリと、ある意味邪悪っぽい笑みを浮かべる。

「水……お前は、この缶ジュースを……」

大切なものを扱うかのように、俺は缶ジュースを顔の前まで持つ  
ていく。

「振れつて言うのか……?」

「その通り!」

水は先ほどとは打って変わって楽しそうに笑い、ぐつと親指を立  
てた。

「だれがするかっ」

間髪置かず俺は突っ込んだ。

「なんでんなことしないといけねんだよ。百二十円がもったいないだろ！」

「なんでって、そんなこと決まってるよ。そっちの方が面白いでしょー、読者のに！」

「誰だよ読者って！　つか、俺の小遣い今月はこれで最後なんだよっ」

「そこは気にしたらダメだよ！　って、今月入ってまだ七日目だよ！？」

「俺の小遣いのことは気にするなっ」

「それは無理！　キミの小遣いの行方が、最近見聞きしなくなったドブ川アザラシの行方ぐらい気になるからね！」

「いやいや、ドブ川アザラシの行方ってそんなに気にならんよな！？」

「さすが迅くん。ナイス推理！」

「ならそんなに引っ張るなっ」

そこで、俺は疲れを吐き出すようにため息をした。

「お前とのツツコミとボケの応酬は疲れるな……」

水は心底楽しそうに笑う。今の俺には、その屈託ない笑みがうらやましくてしょうがない。

「まあ、たしかにね。でもさ、やっぱり漫才に必要なのはノリだし」

まーな、と俺は気のない返事した。

「あー、疲れた」

言って、俺は疲れを吐き出すようにため息をもらす。まあこんなことじゃ疲れは取れんけどな。

「どうかした？　さっきからため息なんかしちゃって。いつもこれぐらいの漫才してるのにさ」

「いや、別に」

そうかなあ、と水は疑わしそうに俺を見る。

「最近迅くん、前より一割ほど元気無くない？」

「お前、俺の感情変化そんなにも読み取れるのか？」

「あ、やっぱり」

水は俺のツツコミを無視していきなりつぶやいた。

「いつもなら、『お前、そんなにも俺の感情変化読み取れるのか？！』って言うはずだよ！」

「……いやお前、いったい何者だ？」

いきなりの裏技登場に、思わず顔が引きつってしまふ。

「……で、いつもより元気ないよね？」

「……かもなー」

そして俺は、憂鬱の原因を思い出してもう一つため息をした。

「あいまいだな。一体どうしたのさ？」

一瞬、流してしまおうかと思った。水なら軽く流してくれるはずだ。なにかと話の解ってくれる奴だからな。けど、

「なんかさあ……最近、妙に考えてまうんだよな」

俺は話すことにした。なんかさ、こう言うことって人に話したら楽になるだろ？ それに水だしな。こういうこと話やすいんだよ。

水は。

「どんなことを？」

「自分の将来のこと、とか」

俺は上にある空を見上げた。そこには綺麗な青空がずっと続いていた。雲が風に乗りのんびりと空を泳いでいる。まだ風は肌寒いが、空だけは一足早く春へと入ったみたいだな。

「俺らもさ、もうすぐ高二だろ？ なんてゆーか……漠然とし過ぎてってゆーか、ふらふらしててさ……」

心配？ 不安？ 恐怖？

俺は続く言葉を見つけれないでいた。

しばらくの間、沈黙が続いた。

「……うん。迅くんが言いたいこと、なんとなくわかるよ」

不意に水が言った。水を見てみると、空を見上げていた。俺も空

へと目を戻した。

「だけど、まさか迅くんがそんなこと考えてるなんて意外だなー。前に先生が言ってたことでも効いた？」

「まあ、結構効いたかもな」

進学とか、就職とか、勉強とか。先生の話聞いて俺は思ったんだ。『俺のしたいこと、俺のなりたいものは何だ？』ってな。

だれにでも目指してるもの、目標ってあるだろ？俺にはそれがなかったんだ。大学に行きたいのか、就職したいのか。勉強したいのか、遊びたいのか。

わからなかったんだ。だから俺は考えてるんだ。それは今も続いて、今こういうことになってるって言うワケだ。

我ながら、気楽に生きてたからなあ。もう少し目標もって生きてるべきだったか？まあ、今更後悔しても遅いんだけどな。

「たぶん、迅くんは答えが欲しんだよ。答えがないから、心配で、不安で、怖いんじゃないかな？」

……そうか。なるほどな。さっき言葉がわからなかったのは、全部だったかからか。

けど水。答えがないからとか簡単に言ってるけど。

「けど、その答え見つけるの難しくねえ？」

「そりゃ難しいだろうねー。自分が将来したいことを見つけるなんてさ」

……あつさり言ってくれるな、コイツは。

「つか、その答え見つけられねえから、俺は前から悩んでんだけど」

「そうだったねー」

「思い切り人事だな、オイ」

「だって、実際人事だし」

いやまあ、そうなんだけどな。

俺が言葉を返すより速く、水は言葉を続けた。

「でもさ、こればかりはキミ自身が乗り越えなきゃいけないこと

だよ。ね、迅くん？」

横目で水を見ると、水は俺に向けてちよつといたずらっぽく笑いかけてきた。……それは、答えはあげないよって意味か？

「それに、こーゆー助言は、キミの近くに自分より適任者がいるしね」

「はあ？ 一体だれのことだよ」

「えゝ？ 迅くん、わからないのゝ？」

水がからかうように言う。

「んなもん、わかるワケねえよ」

「くぬくぬつ、実は色男のクセして！」

「はあ？」

俺はさっきより低い声で返していた。

「まったく、迅くんは鈍いんだからなー。もーいいよ」

少し不機嫌に水は言った。

いきなりなんなんだ、水の奴。

なんだか、言った後に「あんな可愛い子が近くにいくせに……」とかつぶやいたように聞こえたんだけど。

俺の近く……ってか、仲のいい女子？ あー、あいつのことか？

でも、なんであんな天然が適任者？

ぐるぐると思考が回って、でも俺はその思考を止めた。他ごと考えなきゃいかんのに、こんなことまでに頭使ってたまるか。

俺は再び自分の未来のことを考えた。

……俺の得意なことから考えてみるかな。俺の得意なこと……P  
C、ゲーム……ダメだ、思いつかねえ。

なにも思いつかない自分に嫌気がさし、俺はため息を空に向けて吐く。

「はーっ、めんどくせえ。良いよなあ、水は。将来の夢があつてさ」

「将来の夢に向けて前進するのも大変なもんだよ、迅くん」

水が苦笑気味の笑い声をもらした。厄介ごととは無縁な顔してる

くせに、コイツも色々大変なんだな。当たり前か。  
俺もつられ、苦笑する。

「あーあ、あの雲みたいに自由気ままに生きれたらなあ」

俺は、どんな海よりも広く抜けるように青い大海に浮かぶ雲を見て、愚痴るように言う。

「確かに、そうだったらしいのにねー」

「ああ、ホントいいよな」

雲は風に運ばれ、遊んでいるかのようにゆっくりとマイペースで空に浮かんでいた。

どさり、と俺は草の絨毯じゅうたんに寝そべった。

水と別れた後、俺は幼いころから馴染みのある土手に来ていた。考えることがあると、いつもここで寝ころがって、ぼんやりと空を眺めながら考えている。

答えが欲しい、か。しかしまあ、水も簡単に言ってくれるよな。

んなもんが簡単に見つかるなら、とつくに見つけてるっての。

はあ、と俺はため息をつく。

「たーかや。なに辛気くさい顔でため息してるの？」

そう言っただけ俺の顔を覗き込んできたのは、

「ああ、満月か」

幼馴染の天然娘、黄島きしま 満月みつぎだった。友人たち（特に水）いわく

『こんな可愛くていい娘、迅にはもったいない』とのこと。どういう意味だと突っ込みたいところだが、まあ今は流す。

しかしなあ、コイツのどこがいいんだ？ たしかに童顔気味で可愛いと思うが、飛び抜けてるわけじゃない。それに、コイツは本気で天然だから、一緒にいると疲れる。

そんなことを思ってたなら、満月の顔がムツとなった。

「迅、今あたしの悪口思ってたでしょ」

おおつ、なかなか鋭い。

「半分ぐらい正解だな」

「じゃあ、残り半分は？」

……正直に、可愛いとほめてたと言うのも癪じゃくだからなあ、と少し迷った末こう答えた。

「相変わらず幼児体系だよな、と」

「なっ！ なによなによっ！ 人の気にしてることを！ 迅のバカッ！」

案の定、満月は耳まで赤くして怒った。背が小さく童顔な満月は、実年齢より幼く見られがちでそのことを気にしているらしい。特に胸囲とか。たぶん、Aの小さい方だ。平らよりもマシな程度。高ーでこれじゃ、絶望的だな。

満月は、フンツとそっぽを向きつつも、俺の隣に腰を下ろした。

当たり前だが、満月はまだ怒ってるらしく、さっきからなにも話しかけてこない。

そう言う俺も特に話すことがないので、黙って空を見ていた。

今まで見ていた雲が視界の端に流れ、新たに流れてきた雲に視線を移したところ、満月が話しかけてきた。

「ねえ迅。今日はなに考えてるの？」

俺と長い付き合いの友人たちは、俺がここにいて空を見る時は、なにか考え事をしていと言うのは知っている。幼馴染の満月もちろんその一人だ。

「んー、定まっていけない未来の答え」

「なにそれ？ 将来の夢でも考えてるの？」

「まあ、そんなところだ」

ふーん、と満月が感慨深くうなずく。……なにをしみじみと感じてるんだ、コイツは。

「なんだよ。なんかおかしいか？」

「いや、迅もそう言うこと考えるんだなあって」

コイツ、天然なクセに失礼なこと言ってないか？

「どう言う意味だよ、それは」

「だって、迅っていういつもつと気楽にしてるもん。将来の夢？　んなもんどーでもいいし、みたいな感じでさ」

……悔しいが否定できねえ。俺は、まあな、とぶつきらぼつに言った。

「でも、どうしていきなりそんなこと考えてるの？……あ。もしかして、ちょっと前に先生が言ってた進路のことのせい？」

満月と言い水と言い、なんでこんなズバリと当ててくるんだ？

実は二人とも俺と同じように先生の話に影響されてんじゃないか？　違う奴らにピタリと二回も当てられ、疑問に思う。

「ああ、そうだけど」

「そつかあ……それにしても、少し驚いたなあ」  
「なにが？」

「迅が先生の話聞いてたなんて」

……さっきからコイツは失礼すぎじゃねえか？  
そう思ったら、少し腹が立ってきた。

俺は無言で、そこらに生えていた雑草をぶちりとちぎる。そして、不思議そうに俺の行動を見ていた満月に、

「とうつ」

ちぎった雑草を投げた。いい感じに風が吹き、葉は満月の髪にひっかかる。

「ちよつと迅！　なにするのよ！」

——お前がさっきから失礼なことばかり言うからだ——

と俺は言おうとしたが、それは言葉にならなかった。なぜなら満月が振り落としたカバンが、俺の腹にクリーンヒットしたからだ。  
「ッ！？」

俺は腹を抱え、のた打ち回った。い、息ができん！

しばらくして、なんとか咳き込みながら呼吸を確保する。

「こほつ……お、お前、いきなりなにすんだよッ。マジで痛いぞ！」

「女の子の髪は財産よ。それなのに、あたしの髪に草を投げる迅が悪い！」

髪にひっかかってる草を払いながら満月は言う。

つか、カバンはないだろ。道具を使うなよ。しかも教科書とか入ってるだろ、そのカバン。まあ、水の肘鉄とかの方が怖いんだけどな。ひ弱そうな外見しといて、実は強いからなあ、アイツ。それはともかく、コイツには一から道具の使い方について学ばした方が――

と、俺は逸れた思考を中断した。このまま行くと延々と愚痴ってまいそつだったからな。

そこで、まだなにも考えていないことに気づき、また一つため息をし、空をのんびりと泳ぐ雲を眺める。

――雲はいいよなあ。今の俺みたいに気を悩ませることもなくてただ風に流されてるだけでさ。俺もそんな風に生きてえな。

気楽に生きたい。

それが俺のしたい生き方。

だけど、人生そんな楽じゃなくて。

……はあ……

出てくるのはため息ばかり。

そんな思考のループに入っていたら、

「あゝ、甘いものがたべたいなあ。ねえ迅。わたあめ買ってよお」  
満月がいきなりねだってくる。いきなりなんだ、満月の奴。

「なんで俺がおこらないけねえんだよ。ってか、なんでわたあめ？」

まあ、わたあめは砂糖だから甘さは十分だろうけど。

「だって、雲がわたあめに見えるんだもん。いいじゃん迅。買ってよお」

……たしかに、わたあめに見えんことともないとは思っけど。

「無理。金ねえ。食いたきゃ自分で買えばいいだろ」

「ええゝ。なんかお金がもつたいないもん。なんで迅お金ないのよ

お

「満月は、ぶーぶーと頬をふくらませガキっぽく怒る。」

「使っちゃったから金ねえんだよ。それに、自分がもったいないと思うことを人にやらすな！」

「迅のけちいつ。……あ、お金使ったって、もしかしてゲーム買ったの？」

「そうだけど」

「さらにもしかして、ドラ。ンク。ストの新作？」

「そうだよ」

「じゃあ、終わったら貸してねえ」

「当然のように言ってるのが気に入らんけど。別にいいぞ」

「いつものことだし、気にしない気にしない。早くクリアしてねえ」

「はいはい」

俺は適当に流す。

満月は、ゲームなんて興味なさそうな外見をしておきながら、実はゲーマーだ。しかも、かなり上手い。俺もけっこうやる方なのだが、満月と対戦すると勝率は大体、俺4：満月6ぐらいだな。

ゲームを買う気はないのか、満月は俺からしょっちゅうゲームを借りてる。俺が満月から借りたことはほとんどないけどな。

……って、俺はなにを語ってた？

俺は頭を軽く振り、もう一度空を見た。

しばらくの間、俺たちは黙っていた。俺はここに進路の考えに來たわけで、満月としゃべるために來たんじゃないから、満月が話しかけてこなければ必然的に黙ることになる。

別に俺はそれでかまわないんだけどな。

今でも、俺の頭の中では進路のことが、答えという出口を求めて、俺の状況で複雑に変化する迷宮をさまよっている。

……進路、か。

自分の未来がこんな重いもんだとは思わなかったな。ぜんぜん未

来に進めねえよ。これ程慣れないウエイトはないんじゃないか？

……まあ、そんなにもたいしたもんでもないか。

それでも、今の俺には十分過ぎる重りなんだよなあ。

あー、くそつ。同じことばかりぐるぐる回る。

……はあ……

俺は考え疲れ、またため息もらした。

どれだけ黙ってたんだろうか。すごく長く感じるような、逆に短く感じたような気がする程の時間がたった後、いきなり、

「……ほーんと。迅らしくないなあ」

なにしてるんだ？ とでも言うように、満月があきれたように言った。

その口調に、俺は少しムツとする。

「なにがだよ？」

「だって、真面目なことを真面目に考えてるんだもん」

オイ。それは俺への侮辱か？ 俺を馬鹿にしているのか？

「俺がマジメなことマジメに考えたら悪いかよ？」

「別に悪いとは言わないけど、らしくないなあ、って」

「だから、どこらへんがだよ」

「迅ってさ、めんどくさいことはい——つつも『こんなもんテキトーでいいんだよ』って言ってるのに、今回はすごく真剣に考えてるじゃない？ らしくないよ」

「らしくないって言ってもよ、しかたないだろ。ここで俺の将来が決まるようなもんなんだからさ」

今回ばかりは、さすがにテキトーじゃマズイだろ、と俺も思ったから本気で考えてるんだ。

「でもさあ。テキトーでもいいと思うなあ、あたしは」

はあ？ なに言ってたんだ、コイツは？ つーか、ばつちり進路決まってるお前に言われても説得力ないんだけど。

思いつき顔に出てたらしい。満月は苦笑して、言葉を続けた。  
「だってさ。ずっと先の未来の自分を考えたって、わかるはずない

でしょ？ もし今わかったりしても、未来の自分はそうだと限らないし。だったら、テキストでもいいんじゃないかなあって」

まあ、確かにそうかもな。それに、そっちのほうが俺らしきものなるな。

「……いいかもな、それ」

俺は、いつもの屈託ない顔をしている満月を見て、口だけで笑みをつくる。満月も笑い返してきた。

「けどな、それでフリーター。いやニートになっても困るぞ？」

満月は、予想外の答えをもらったように、あー……、と明後日の方を向いた。つか、マジで予想外の答えだな、絶対。それぐらい考えとけよ。この天然娘。

じとつとした目で満月を見てみると、と満月はなにかを思いついたように、おっ、と言う。まーた変なこと思いついたんじゃないだろうな？

「……じゃあ、そうならあたしが養ってあげよう！」

ぶっ飛ぶぐらい予想外の答えに、口を開けたまま固まってしまう。

気まずい、気まずい沈黙。笑顔のまま電池が切れた電子玩具のように停止している満月の頬に、一筋の汗が流れる。

「もしかして……すべった？」

「当たり前だ！」

俺は叫んで突っ込んだ。いったいコイツの思考回路はどうなってるんだ？

満月は、えへへとはにかんで笑う。

俺も苦笑気味で笑う。

「でも、いいな。ごちゃごちゃ考えるより、テキストにやってく方が楽だし。それでいいわ」

「うん。そっちの方が迅速的だよ。あの空に浮かぶわたあめみたいで」

「はあ？ なんだそれ」

空に浮かぶわたあめ……なんかほんわかしてるなあ。

「ほら、雲つてわたあめみたいに見えるでしょ？」

確か、さっきもそんなこと言つてた気がするな。

「で、なんでそれが雲みたいなんだ？」

「だつて雲つて、のんびりゆっくりマイペースに浮かんでるよね？」

なんかそれが迅みたいだもん」

……なんとなく納得。つーか、納得しちまった自分に軽く疑問覚えるんだけど。

「じゃあ、そうするかな。空に浮かぶわたあめのように、テキトーにマイペースでな」

俺は笑いながら言う。

「うん！」

それに満月は満面の笑みで返してくれた。

……そー言や、水が言つてたな。満月が適任者だつて。今なら、マジでそうだったのかもと思えるかな。まあ、今だけだろうけどな。

……この後、俺は満月にわたあめをおごつた。つて言うかおごらされた。実はコッソリと隠してあつた500円を使わされたのだ。くっそー。隠してあることなんてすべらすんじゃなかった。俺の口のバカ野郎っ。

俺は一つの壁を乗り越えたと思つたら、新たな壁——金不足に頭を悩まされることになった。まったく、たまつたもんじゃねえよ。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 楽しんでいただけたなら幸いです。  
もしよければ、感想・批評をお願いします！ 面白かったですから、  
つまらないというものまでお待ちします！ 辛口、酷評を大歓迎  
です！

HPのほうでは、対話形式のあとがきも載せてますので、興味がある方はぜひ覗いてやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9668a/>

---

空に浮かぶわたあめのように - あの雲のようにのんびりと -

2010年10月8日15時14分発行